慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	竹内運平著 北海道史要
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.9 (1935. 9) ,p.1393(149)- 1395(151)
JaLC DOI	10.14991/001.19350901-0149
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350901-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

竹内運平著「北海道史要」

氣賀健三

北海道の歴史に就て研究を志すものは何人でも先づ第一に故河野常吉翁の編纂に係る所の北海道史を繙くに相違ない。此書は北海道廳の委囑に依り、本道の生字引と言はれた氏が、畢生の志望を成就せんとして着手した結果出來上つたものであるが、其成果は不幸にして、僅かに、本編維新前一冊、年表一冊、附圖一冊を刊行したのみに終つた。當初の豫定の中に含まれて居つた所の明治維新後の歴史は、道廳當局と著者との間の衝突の爲に遂に斷絶して仕舞つたのである。

其後を受けて道史編纂の事業は、竹内運平氏に依つて繼續されることに爲つたが、之も亦業ならざる中に中絶するといふ不幸に遭遇するに至つたのである。

此處に紹介する同氏著「北海道史要」は氏の編纂主任辭職後の著作である。此書卷末の「跋」中に記す所に依れば、氏の多年苦心研究の結果が世に發表せられざるを惜しんで、函館圖書館長岡田健藏氏及び函館教育會長齋藤與一郎氏の援助に依り、道廳とは全く無關係に刊行された一單行本である。

本書は全九章より成る。第一章と第二章とは維新前の蝦夷島史に充てられ、第三章より第六章に至る部分は開拓

竹内運平著「北海道史要」

使施政中の事歴の敍述である。此部分は分量に於て全巻中の三分の二を占め、著者が最も苦心を費せる所である。第七章は三縣時代第八章は道廳施政時代第二期拓殖計畫概觀を以て終つて居る。第九章は結言として沿革の大勢、奥羽拓殖との比較等の簡單なる敍述が其内容を爲して居る。

本書を通讀して先づ第一に看取し得る特色は所謂る原資料の參照引用に於て頗る豐富なことである。歴史の記述に當つて史家の採る可き道として可及的原資料に依據すべきことは當然の次第に相違ないが、それは仲々容易なことで無く、殊に本書の如く、相當長年月に渡る波瀾多き期間を政治、法制、經濟其他あらゆる社會萬般の方面から探ることを目的とする書物に在つては之が蒐集整頓は決して容易に爲し得る業ではなからう。大多數の歴史書は概括的記述に急なる餘り個々の事實に就ては其れの資料、典據をすら探り得ないことがある。此點に於て、本來ならば本書の前編たる可き運命に在りし河野翁著「北海道史」第一編と較べて本「史要」は優るとも決して劣らぬといふことが出來るであらう。

明治維新以後、開拓使史實に關する記錄としては代表的權威あるものとして北海道志、開拓使事業報告等があるが、此等は要するに官營事業の報告であつて民間の史實に缺ける所多く、些か砂を嚙む思ひがする。斯樣な不備は然るに此「史要」に於ては頗る能く補はれ、此點に於ては正に敬服すべき好著といつてもよいであらう。筆者未だ寡聞にして其内容に就ては是非判斷する力無く、之を批判するを得ないが、其忠實なる典據明示の跡より推察するならば、其記述は總ての方面に於て正確に信用し得るものであらうと信ずる。唯こ最後に讀後の希望を述ぶることを許されるならば、何となく物足らなさを感ぜしむることは斯樣な大著の屢ゝ落陷り易い弊として全體としての統一を讀取ることが困難なことである。或は政治、或は經濟、或は法制と種々雜多な社會上の變遷の跡を一つ〳〵文獻に依つて一冊の本に纒め上げることは、それ〴〵の部門に於ける一貫せる記述を大に妨げて居る觀がある。同時に又一個の明瞭な歴史觀といふべきものゝ樹立されて居らぬやに見受けられるのである。

斯樣な點は或は著者本來の目的とする所では無いのかもしれぬ。開拓使時代の歴史的變遷の跡を忠實に探索し記述することこそ本「史要」の究竟の目的であるのであらう。然りとすれば此點に於ては、此菊判八百頁に垂んとする大著は後進研究者に取つて實に有難い好手引であり、又同時に道史研究上の一大金字塔である。聞く所に據れば、更に一層内容豐富たる可きであつたものを出版上の都合よりして著しく省略縮少したのが本書であるといふ。筆者は多數讀者と共に更に機を得て殘されたる幾多の史實が世に弘く印刷流布せられる日の近からんことを切に祈るものである。（菊判七七四頁、定價五圓、市立函館圖書館發行）

附記　筆者は今夏函館に遊び道史の一部を研究する機會を得たるに際し、同市立圖書館長岡田健藏氏の好意に依り種々研究の便宜を與へられ、本書を示されたのである。此書は昭和八年七月の發行に係り、歴史研究家には既知の書籍かも知れないが本書を通讀して其大に價値ある書籍たるを思ひ、淺學をも顧ず敢て此處に紹介の筆を取つた次第である

（一九三五・八・二八記）